



新型コロナ狂騒曲・アメリカ編

かも よしのり
賀茂 美則

●ルイジアナ州立大学社会学部 教授 学部長

話題は全てコロナがらみと言っても良いほどの今日、「屋上屋を架す」の危険を承知で等身大から見た「新型コロナ狂騒曲・アメリカ編」を書いてみることにする。

日本では知られていないかも知れないが、筆者が住むルイジアナ州の人口あたりの新型コロナによる死亡者の率はニューヨーク州と、隣接した3州（ニュージャージー、コネチカット、マサチューセッツ）に次いで5位である。465万人、日本の27分の1の人口に対して2,242人が死亡（5月11日現在）しており、日本の613人と比べると死亡率は99倍である。

小中学校は3月16日から夏休みまでの2ヶ月半休校、3月23日からは「ロックダウン」が始まり、「必要不可欠な職業」以外は自宅でのテレワークとなった。筆者が教鞭を取る大学は3月16日から1週間休校となり、23日からの春休み後は、全てオンライン授業となった。大学構内は立ち入り禁止である。

何もここまで、と思われるかも知れないが、新型コロナの「感染爆発」を目の当たりにすれば従わざるを得ない。何しろ最初の患者が発見されてから9日目に、1日あたりの新規感染者が200人を超えたのだ。人口がちょうど3倍の東京都で200人を超えるには60日以上かかっており、それもわずか1日だけ。文字通り、桁が違うのだ。

テレビをつければこれも文字通り、毎日州知事と市長が自分の言葉で語りかけてくる。現在の状

況、新規感染者数、死亡者の数、医療機関がいかにして危機に陥りつつあるか。どこぞのリーダーの作文棒読みなどとは全く縁がない。ここまで「正しく怖れる」ことができれば、ロックダウンに反対する輩などはほんの少数だ。

とは言え、街がゴーストタウンになったかと言えば、そうでもない。というのも、食料や生活必需品の買い物、必要な医療サービスは許されているので、客や患者として移動する場合もあれば、そういった企業や機関で働く人たちが移動しているからだ。車の交通量は普段の半分くらいだろうか。やけに主要道路の工事が目に付くのが可笑しい。普段なら夜中に肩身の狭い思いをしてやるのに、今は堂々と昼間にやっている。

「他人の家への訪問禁止」とは言っても、隣の高校生のところにはガールフレンドが1日と空けずにやってくる。許せないのは「集会禁止命令」に堂々と背いてミサを開く教会だ。毎週のように警察がやってきて「違反キップ」を切っていた。「神の力」で感染を防ぐらしいが…。

ショッピングセンター、映画館、ジムなどは全て閉鎖、知り合いを訪ねることもできないので、人々は家に籠るか、散歩をするか、庭仕事をする。つれあいはもともと専業主婦だが、友達と趣味のビーズやランチの会ができないし、レストランもテイクアウトとデリバリーしかないので、猛然と料理を始めた。1日おきにレストランレベルのディナー。パンは試行錯誤しながら何種類も作り、

さらにはスイーツ。普段なら作らない和菓子たち。庭の木の葉を使った柏餅、イチゴ大福、白玉ぜんざい、水羊羹、くず餅もどき…。豆乳ゼリーにかけるのは自家製のジャム。問題は筆者の体重である。なんと言っても「作りすぎたから知り合いにおすそ分け」ができない。

空いた時間は映画鑑賞かインターネット。オペラが趣味のつれあいは、普段なら見れない貴重なオペラがユーチューブで流れているので、1日中観られてご機嫌である。筆者はと言えば、摂取したカロリーを消化するのにエアロバイクでいつもなら観ないような長めの映画を観る事になる。

家の外はと言えば、コロナ騒動以前は見なかった数の人たちが散歩している。親子で自転車を連ねる家族連れも多い。家の前に椅子を置いてそれを見物する隣人もいれば、窓際にぬいぐるみを置いて散歩する人たちを楽しませる家も多い。大きな猿のぬいぐるみがつまらなさそうに椅子に座っており、その口にマスクがかけられていたのには大笑い。

庭仕事や大工仕事は大盛況。斜め向かいの隣人は夫婦で家の周りのペンキ塗り。別の隣人は歩道に迫り出しているツツジを剪定してくれたので、いつもの散歩道が綺麗になった。筆者はと言えば、葉っぱなど、長年の堆積物で高くなってしまった裏庭の枯れ沢を掘り返す事にして、小型の耕運機をレンタルしてきた。雨が降ると流れがよくなり、ご機嫌である。

ただし、表面には現れない「ひずみ」は当然のように、ある。道路工事の人夫や大工、屋根職人などは圧倒的に黒人やヒスパニック系などマイノリティが多い。耕運機をレンタルした時も、整備や客との受け渡しは全て黒人であった。テレワークができるのはいわゆるホワイトカラー層に限られており、力仕事やサービス業（特に今も営業しているスーパーマーケット）に携わる人たちは感染の危険を覚悟で仕事に出ないと生活ができない。

その結果、どうなったか。ルイジアナ州の人口中、黒人の割合は3割なのに、新型コロナによる死亡者の割合はなんと7割にも達している。ヒスパニック系を加えると8割を超えるかも知れない。職業以外にも、既往症の有無が死亡率に大きく影響する新型コロナは、普段から頻繁に医者にかか

れるような医療保険に加入していないマイノリティや経済的弱者を集中的に襲うのだ。

家に籠る事になれば、それまで以上に家族の存在が重要になる。普段は子どもと接する時間が十分に取れない親も一日中一緒にいる事になる。ある意味ではチャンスで、先に挙げた自転車や庭仕事の他にも、ゲームをする、テレビやユーチューブと一緒に見る、庭先でのキャッチボールなど、親子の触れ合いが増えるのが必然だ。

ただしこれは諸刃の剣。もともと関係が良好な家族ならいいが、そうでないとマイナスの部分の振れ幅も大きい。家庭内暴力の増加が報告されている。子どもや女性などの弱者にはこれまであった逃げ場がないのだ。「近所づきあい」が減るので、外部の人間に気がつかれることも少なくなる。「コロナ離婚」も増えている。逆に、筆者の予想では年末から年始にかけて、全米で「ベビーブーム」が到来する。日本も、「緊急事態宣言」のおかげで少子化が少しは解消されるだろうか？

また、学校がないので、オンラインで授業をしている一部の私立校以外は、親が勉強を教えなければならない。公立教育の特徴は、教育程度や社会階層など、親の属性による子どもの不平等を是正することだ。夏休みの前より後の方が学力と親の教育程度の相関が高いことも知られている。「毎日が夏休み」の今、子どもの日常は親の属性に大きく左右される。授業が再開された時の学力への影響、特に親の格差が子どもに与える影響について心配しているのは筆者だけではない。

新型コロナが社会に与える影響は、健康という一面だけではない。ここルイジアナ州でも、ハリケーンカトリナやメキシコ湾での原油流出の影響は、経済的な要因を媒介として社会的な弱者に集中的に現れてきた。仮設住宅、避難先での生活、学業の中断や計画の変更など、東日本大震災の影響も同様である。

新型コロナが収束した後の世界は今とどう違っているのだろうか。人間関係は今より希薄になるのか。テレワークの普及を含めた労働環境はどう変わるのか。格差社会は今より進展してしまうのか。国家間の力関係は変わってしまうのか。

今は誰にもわからないが、興味深い以上に、心配である。